

The 10th Japan-Korea Symposium on Materials and Interfaces

表題のシンポジウムが 2012 年 11 月 7 日－9 日にわたって京都市のコープイン京都で開催された。本シンポジウムは、韓国の化学工学会および KAIST を中心とした韓国の材料研究者と日本の材料研究者との情報交換のために 2 年に 1 回開催されてきたが、日本の化学工学会に材料界面部会が発足したのを機に、2003 年からは、化学工学会材料・界面部会と韓国化学工学会材料部会 (Materials Division of KICChE) が共同して、隔年に開催しているものである。

2 年に 1 度のシンポジウムを通じて、化学工学、化学、材料工学分野において材料、界面に関する研究に従事している日韓の研究者が一堂に会し、互いの研究成果について知見を深め、さらなる研究の進展に資すると共に、人的交流を促進するための機会としており、現在の形で開催されるようになってから、Jeju(2003 年)、別府(2004 年:アジア太平洋化学工学会議に合わせて開催のため、1 年後に開催)、Gyeongju(2006 年)、札幌(2008 年)、Yeosu(2010)の順に開催している。そして、2012 年の本シンポジウムは事前参加登録者数が 100 名を超え(日韓の登録者比率はおおよそ半々)、節目の 10 回目に相応しいシンポジウムとなった。実行委員長は、日韓それぞれの当該部会長である宮原稔教授(京都大学)ならびに Yoon-Bong Hahn 教授 (Chonbuk National University)である。

今回は、オーラル発表はすべて招待講演とし、両国からそれぞれ 2 件の Keynote lecture と 9 件の口頭発表講演が行われた。一般発表となるポスター発表には、日本から 38 件、韓国から 32 件の申し込みがあった。オーラル発表をすべて招待講演としたのは、本シンポジウムでも初めての試みであったが、予想通り講演の水準は高く、日韓両国の化学工学の材料・界面分野の第一線で活躍している研究者からホットな話題が提供された。日本からの発表は多様な内容の基礎研究に特色が見られたのに比して、韓国からの発表は電子、光学材料など技術的注目度の高い分野のものが目立つように感じられた。ポスター発表には、それぞれの国への留学生を含む多数の学生の参加もあり、会場が狭く感じられるほどの盛況であった。優れた 4 件の学生の発表に恒例のポスター賞が与えられた。

Banquet は 2 日目の夜にがんこ三条本店で開催された。韓国側参加者には、1階正面の寿司カウンターの存在や和室(椅子つき)に配膳される料理などが日本風と感じられたようで、日本側実行委員の予想以上に好評なようであった。かなりの数の韓国側参加者が、舞妓さん、芸妓さんに出会えることを期待して Banquet 終了後に祇園方面に出かけて行ったようである。

3 日目は午前中に学術プログラムを終了し、午後からは観光バスで龍安寺、鹿苑寺(金閣)、清水寺への観光に出かけた。平日の金曜日であったが 11 月の京都は観光客であふれており、とくに清水寺では参加者がバスに戻ってくるできないのではないかと思うほどの混雑であったが、ホテルまで歩いて帰った数人を除いて、集合時間に全員がバスに集まったのには、経験豊富なガイドさんも驚いていた。

観光にまで見られた参加者全員の調和のとれた行動や、学術プログラムで感じられた真面目な討論とリラックス感の適度なバランスに、異なる国とはいえ東アジア共通の文化基盤を共有している間柄であることを感じることできた 3 日間であった。このような恒常的なシンポジウムの開催は、それぞれの国の研究者の密接な交流の基盤となるものと期待でき、さらなる発展が望まれる。

Secretary General: 同志社大学 塩井章久